

ユネスコ無形文化遺産に和食が登録され、その主役はお米ともいわれています。

先日、ふと立ち寄ったコンビニのおにぎりのコーナーに、海苔もなにもついてない塩おにぎりが売っていました。そしてそこには「銀しゃり」と書かれており、ふと、銀しゃりと普通に使うものなのかと思いました。

白米のことを、銀のように輝く米として「銀しゃり」ということがあります。

この「しゃり」という言葉は、インドの古い言葉で「骨」をあらわす「シャリーラ」からきているといわれています。

仏さまのご遺骨のことを「<sup>ぶつしゃり</sup>仏舍利」といい、仏教徒は信仰の対象として大切にお守りするものとなっています。

お釈迦さま亡き後、ご遺骨は残された人々によって大切に<sup>まつ</sup>祀られ、お釈迦さまを慕<sup>した</sup>いう思いと共に<sup>すうはい</sup>崇拝されてきました。そして、仏舍利に対する信仰が広まり、その信仰の拡がりにより仏舍利を細かく分けたため、米粒のような大きさになってしまい、形が似ていたことから、お米を「<sup>しゃり</sup>舍利」と呼ぶようになったという説が有力です。お釈迦さまの仏舍利も、お米も、信仰に生きる私たちには大切なものです。

仏教を信仰する日本では、墓地には大切なご先祖様のご遺骨をお<sup>まつ</sup>祀りし、仏さまとして信仰の対象としています。

ご飯をいただく際に、一緒に<sup>かんろに</sup>甘露煮を召し上がる方もいるかと思います。魚や貝などの食材を醤油と砂糖などで煮て、甘じょっぱく作られたものです。

実はこの甘露煮の「<sup>かんろ</sup>甘露」ということばも仏教用語からきたものです。インドの古い言葉で「アムリタ」といい、神々の飲み物、<sup>ふし れいやく</sup>不死の靈薬といわれるものが、「甘露」です。

<sup>ひで</sup>日照りが続き、<sup>さくもつ</sup>作物を育てる上で欠かせない雨を待ち望む時、やっと降る雨を甘露に例え、さらに人が成長する上で、お釈迦さまの教えが必要であるということで、慈悲深いお釈迦さまの教えを、甘露の雨に例えたのです。

このように身近には、仏教由来の言葉があふれています。もしかしたら、この言葉は仏教語かも知れないと思い、探してみるのも有り難いことではないでしょうか。

「有り難い」も仏教由来の言葉でありますので。